

Title	ドイツの「中世ロック」について
Sub Title	Über „Mittelalter-Rockmusik" in Deutschland
Author	識名, 章喜(Shikina, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.118, (2020. 6) ,p.101 (142)- 112 (131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度藝文学会シンポジウム「詩とその活用：5カ国篇」 開催日: 2019年12月13日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール・東館5階
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01180001-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツの「中世ロック」について

識名 章喜

独文専攻の識名です。川口先生からは中世のフランス文学、宮廷の恋愛文学、高橋先生からは「クリスチャンロック」、ロック音楽としての讃美歌について興味深いお話がありました。その二つのお題を足して二で割る形になりますが、私がこれから扱うのはドイツの音楽シーンでジャンルを形成している「中世ロック (Mittelalterrock)」です。

あるドイツ語の初級教科書に収められた対話文なのですが、南部ドイツのカルテンベルク (Kaltenberg) で開催される中世祭が話題になって、その祭で「中世ロックグループ」の音楽を聞いて感動したと語る場面がありました。これは教科書の例文にある架空のインチキな文章かと思いきや、ちゃんと調べてみると、たしかにそのようなグループがあるということが最近わかりまして、今回はそれについて調べたことを皆さんに紹介したいと思っています。

そもそも「中世ロック (Mittelalterrock)」とは、1990年代から使われだしたジャンル概念です。基本的には「ロック」や「ヘヴィ・メタル」に括られる音楽運動ですが、特徴がいくつかあります。一つはドイツ語で歌っているという点です。一般的にドイツでもロックというと英語で歌うのが主流です。(西)ドイツ出身のグループで1970年代から国際的に活躍しているスコーピオンズやハロウィンといった有名どころがそうです。けれども、東西ドイツが統一する1990年以降ですが、ドイツ語で歌うロックが意外にも流行り始めるんですね。その大きなきっかけになったのが、ご存知の方も多いかと思いますが、旧東ドイツ出身のラムシュタイン (Rammstein) というグループです。

ラムシュタインは完全なヘヴィ・メタ・バンドです。6名のメンバー全員が巨

漢で、そのパフォーマンスの派手さで「ど変態バンド」(奥村裕司)と言われているが、ドイツ語で歌っているにもかかわらず、英米圏やロシア、さらには日本でも話題を呼び、世界的な成功をおさめております。その歌唱のスタイルが、ドイツ語の特徴である子音や破裂音の硬さ、巻き舌のr音を過度に強調するもので、こういうドイツ語によるヘヴィ・メタルのブームが「新ドイツ・ハード (Neue Deutsche Härte)」というムーヴメントを形成してゆきます。つまり、英語で無理しなくとも、ドイツ語で歌ってもいけるぞという機運が生まれたのですね。で、そのなかから二つ目の特徴として、ロックの基本的な楽器構成(エレキ・ギターとドラム、シンセサイザー)に中世音楽の楽器によるメロディーをミックスするという新しい試みが登場します。

この中世音楽の基になっているのが、メロディーやリズムなど参考にできるものとして資料が残っている14世紀末ごろの舞踏音楽です。中世音楽は音楽学の世界では現存資料を基にして当時はこのような音楽だったのではないか、こういう楽器を使っていたのではないか、という推察の上に成り立っています。欧米の古楽器演奏の世界では1960年代以降、多少の脚色も交えながらの録音も盛んになりました。イギリスのデイヴィッド・マンロウなどその草分け的存在です。時代相を反映シアラビア風の要素も採り入れながら奏でられているメロディーもあります。中世ロックグループがしばしば引用するのが古楽器で演奏される舞曲なのですが、そのメロディーを活かすためには、どうしても古楽器にこだわらざるをえなくなります。リコーダー(縦笛)や「シャルマイ (Schalmei)」、「シャルマイ」はオーボエの原型楽器で要するにチャルメラですね。それから「ドゥーデルザック (Dudelsack)」(これはバグパイプのことです)、ヴァイオリンの前身楽器である「フィーデル (Fidel)」、「ハーディーガーディ (Drehleier)」などです。それからドイツのグループがよく使っているのがスウェーデン発祥の弦楽ハーブです。こういった楽器は正確には中世ではなく、14世紀ルネサンス期の舞踏音楽において使われてきた楽器です。これらの古楽器をロックのバンドが応用し始めたわけです。古楽器は音量は小さいですから、アンプで増幅して従来のロックバンドのエレキ・ギターと合奏させたのが中世ロックです。

「中世ロック」の第三の特徴が中世っぽい語彙です。まあ当たり前と言えば当たり前ですが、騎士やミンネ(貴人への愛)、悪魔、魔法、魔法陣、魔女、盗賊、絞首台など、なんとなく中世の文化史・社会史のなかで出てくるようなキーワー

ドが歌詞のなかに散りばめられています。

さらに補足するなら、ロマン派的語彙が多い点も指摘できます。「森 (Wald)」であるとか「夜 (Nacht)」であるとか、あるいはゲーテの『ファウスト』で有名な悪霊たちの集う「ワルブルグスの夜 (Walpurgisnacht)」や幽霊の出る時刻「夜中 (Mitternacht)」といった言葉が多用されます。先ほどの高橋勇先生のクリスチャンロックとも関係あるのですが、神の住まう「天空 (Himmel)」や「星辰 (Sterne)」、「月 (Mond)」という語も歌詞の定番です。それから、これこそ本当にロマン派という感じなのですが、「憧れ (Sehnsucht)」も中世ロックお気に入りの単語です。こういったある意味反時代的な博物館行きの語彙を使って、そもそもロックが可能なのかということ、これを考えてみたいと思います。

歌詞の古めかしさを文法的に演出する工夫もなされます。俗にザクセン2格といってドイツ語の名詞を2つ繋げる場合、例えば「父の車 (das Auto des Vaters)」とするなら、「父の」という2格の名詞は「車」の後ろに来るのですが、この2格の名詞を先に出す用例が中世ロックの歌詞にしばしば見受けられます。これは実は古い用法で、詩の世界 (あるいはオペラの歌詞) では韻を合わせるためによく使われるのですが、現代ドイツ語では稀な用法です。

「中世」ということで免罪されるのが政治的正義に関わる問題です。「女」を表す „Weib” という語があります。これは現代では公共の場で「女」という意味では絶対に口に出してはいけないような言葉です。「売女」のような罵倒語になってしまいます。「中世」だから許されているのか意外と歌詞に頻出します。

特徴の第四が、先にラムシュタインに言及した際に挙げたドイツ語特有の子音の響きの強調です。r の音です。[r] を発音する際には巻き舌の場合もあれば喉を震わせる「エル」の音もあります。いずれもドイツ語ならではの唯一無二の音です。これは聞いていただくとわかるのですが明らかに意識的に発音しています。それからドイツ語では、例えば「バッハ (Bach)」のように ch の音に特徴があり、口蓋で息が擦れるような音を出します。ドイツ語子音の代表とも言える語末の -t の音や過去分詞で語頭につく ge- の音も強調します。こういった音で構成された歌詞から「新ドイツ・ハード」という命名の理由もうなずけます。つまりハード=硬さ、ドイツ語特有の音の硬さを意識的に強調するような曲作りが「中世ロック」の特徴でもあるのです。

代表的なバンドとして今日紹介するのは、Svbway To Sally (略称 STS)、

Schandmaul (シャントマウル=意味は「口悪」、Bannkreis (バンクライス=意味は「魔圏」というバンドです。もう名前もそうですが、黒い皮ジャンにブーツの野郎どもといった風体にもマッチョで怪しげなものが多いんですけど、このなかで「サブウェイ・トゥー・サリー (Svbway To Sally) が「中世ロック」の草分け的なバンドです。今回は紹介できませんが、In Extremo (イン・エクストレーモ=ラテン語意味「最終的」) や Feuerschwanz (フォイアーシュヴァンツ=意味「火の尻尾」)、Letzte Instanz (レッツテ・インスタンツ=意味「最終審」)、Saltatio Mortis (サルタチオ・モルティス=ラテン語意味「死の舞踏」)、Tanzwut (タンツヴート=意味「踊り狂い」といったグループがひとまず「中世ロック」で括れるかと思います。彼らの活動の場は、一般のロックやメタルのそれと変わりはないのですが、彼らだけが優遇される場がドイツにはあります。それが夏に各地で開催される中世祭の会場です。そこでは日本の流鏝馬のような騎士の槍投げや武装騎士の馬上試合の見世物があり、口から火を噴くアトラクションや手品大会もあれば、中世の市も開かれる。このような雰囲気の中で行われるコンサートに中世ロックグループが出ていくチャンスがあります。

さて「中世ロック」の代表格の Svbway To Sally です。このグループは 1990 年に結成されました。94 年にファースト・アルバムをリリース後、現在に至るまで息長く活動していますが、『魔圏 (Bannkreis)』という 1997 年のアルバムに収められた「愛の魔法 (Liebeszauber)」というのをちょっと聴いていただきます。この歌詞を書いているボデンスキ (Bodenski) という人物、彼がバンドの創設メンバーで、ミヒャエル・ボーデン (Michael Boden) が本名です。ボデンスキは旧東ドイツ、ポツダム出身で、このグループも旧東ドイツ出身者のグループだという点も面白いですね。統一後新設されたポツダム大学でドイツ文学と社会学を専攻し、それからバンドを作って活動し始めました。S T S の歌詞担当でギターやヴォーカルを担当することもあります。S T S のメインヴォーカルはだみ声がちょいワル感を出しているエリック・フィッシュ (Eric Fish) です。英米風の名前にしていますが、本名はエーリック=ウーヴェ・ヘヒト (Erik-Uwe Hecht)、彼も旧東独出身です。本名の Hecht は「カワカマス」の意味なので「フィッシュ」という芸名にしたのでしょうね。

Svbway to Sally: Liebeszauber

Dort wo gar nichts wachsen sollte
Und nur Stein vom Berge rollte
Hab drei Blumen ich gepflanzt
Und mit Wünschen nachts umtanzt
Hab bei Vollmond sie gegossen
Drei Mal in die Luft geschossen
sie mit meinem Blut genährt
Dass die Liebe ewig währt

AbraKadabra

Bald schon, bald schon bist du mein

Als die Sterne günstig standen
Und die Kräfte sich verbanden
Sprach mit Tieren ich und Pflanzen
Musste mit dem Einhorn tanzen
Hab gefastet sieben Tage
Schief in unbequemer Lage
Gab dem Wind ein Haar von dir
Morgen schon gehörs du mir

AbraKadabra

Bald schon, bald schon bist du mein

Dann zog ich mit dem Dolch drei Kreise
Und sang auf ganz besondere Weise
Schnitt dann stumm die Blumen ab
Trug sie in das Tal hinab

「愛の魔法」

何もが育ちようのない、あの場所に
山から転がる石しかない あの場所に
花を三本植えた
願いを胸に夜通し踊りまわりながら
満月の晩には水を注いだ
三回空に向かって撃ち
自分の血で花を育てた
愛が永遠のものになるように

アブラカダブラ

もうすぐ、もうすぐきみは私のもの

星座の位置が好運を示し
もろもろの力が合わさったとき
私は動植物と言葉を交わし
一角獣と踊らねばならぬ定め
断食しながら七日間
寝苦しい状態で眠った
君の髪の毛一本を風に任せ
明日になれば君は私のもの

アブラカダブラ

もうすぐ、もうすぐきみは私のもの

短剣で地面に環を三つ描き
奇妙な歌を歌い
黙って花を手折り
それを持って谷へと降りていった

Aus „Bannkreis“ (1997)

「愛の魔法」とは、女性を自分のものにするための魔法の儀式であり、ドイツ・ロマン派によくある、悪魔に頼んで望みをかなえてもらう民間伝説の世界を描くような歌詞になっています。例えばこの最後の「花を手折る」というのはゲーテの民謡詩「野ばら」を念頭においた表現です。

さらに折った花を手に持って谷へ降りて行くのがなんで女性をものにするための儀式かというと、実はこれもグリム兄弟の『ヨリンデとヨリンゲル』という有名なメルヒェンを下敷きにしており、魔女に奪われた許嫁を助けにいく主人公が、真珠の玉のような大きな朝露のついた花を手に魔女の館に押しかけ、それで自分の恋人を魔女の魔法から解くという話なのですが、ドイツの口承文芸の伝統的な素材で曲作りをしているのがこのグループの特徴であると分かります。

「中世ロック」を代表する現在も活動中のもう一つのグループがバイエルン州出身で1998年に結成されたシャントマウル（意味は「口悪、毒舌」というグループです。2002年にリリースされた三枚目のアルバム『阿呆の王様 (Narrenkönig)』に収められた「フォーゲルフライ (Vogelfrei)」という曲があります。そしてこのvogelfreiという言葉は多義的で訳しづらい。フォーゲル Vogel は「鳥」、フライ frei は「自由」だから「鳥の自由」か、と思うと大間違いで、実は中世・近世のドイツでよく使われていた「鳥を殺してもいい／撃ってもいい」、ここは「法が及ばない」ところだ、「法律の埒外にある」という意味の言葉です。その意味をおさえたうえで、「鳥のように自由だ」という歌詞と絡めながら歌っているのがこの曲なのです。

Schandmaul: Vogelfrei

Wir stehen in dunklen Ecken,
streifen über den Markt
Wir wissen ganz genau,
wer was zu bieten hat
Was lose in den Taschen
oder achtlos unversperrt
Wechselt den Besitzer –
uns ein warmes Mahl beschert

「フォーゲルフライ（おれたちや、無法者）」

暗い物陰に立ち、
いち
市を探り歩く
心得たものさ、
誰が何を商うか
誰の財布のひもがゆるく
誰の財布が無防備に開いているか
財布の持ち主が変われば、
おれたちには温かい食事が待っている

Versteckt in dunklen Wäldern,
lauern wir dem, der verirrt
Wird seines Guts beraubt,
wenn er sich auch ziert
Wir flüchten vor den Häschern,
die man nach uns ausgesandt
Der Steckbrief unserer Bilder
ist im ganzen Land bekannt

Wir sind frei wie die Vögel!
Wir sind vogelfrei!
Wir ziehen mit ihnen im Wind!
Wohin ist einerlei!
...

Wir haben schon in dunkler Nacht,
des Grafen Maid gestohlen
Und für ein Lösegeld durft' er sie
wieder holen
Wir gaben schon dem Schäfer,
mächtig Schnaps und mächtig Wein
Als er betrunken schlief,
wurde seine Herde klein

Wir schmuggelten verbotene Ware
durch das Land
Falschgeld gaben wir von Hand zu Hand

An Väter schöner Töchter
den Heiratswunsch entsandt

暗い森に隠れ、
おれたちゃ迷い人を狙っている
有り金いただくお相手は
気取ったやつ
おれたちゃ追っ手を逃れるのみ
追っ手は八方に派遣され
おれたちの手配書きは
全土に知れわたっている

おれたちゃ、鳥のように自由
おれたちゃ、無法者
鳥と一緒に風まかせ
どこへ行こうと同じさ
(リフレイン)

闇夜に
伯爵の娘をかっさらった
伯爵に身代金の
要求さ
羊飼いは
火酒と葡萄酒をしたたか飲ませ
奴が酔いつぶれば、
肉はこっちのもの

禁制品を国中で
密売し
手から手へと贖金渡す

美しい娘たちの父親には
結婚の申し出を送りつけ

Und mit der Aussteuer
nach der Hochzeit durchgebrannt

Wir sind frei wie die Vögel!
Wir sind vogelfrei!
Wir ziehen mit ihnen im Wind!
Wohin ist einerlei!
...

Hin und wieder kann's geschehen,
dass man einen erwischt
Der baumelt dann am Galgen,
bis sein Leben erlischt
Doch wollen wir uns nicht grämen,
denn der Lohn ist frei zu sein
Wir gedenken seiner bei 'ner
guten Flasche Wein

Denn wir sind frei wie die Vögel!
Wir sind vogelfrei!
Wir ziehen mit ihnen im Wind!
Wohin ist einerlei!
....

持参金をいただいて
婚礼終わればトズラさ

おれたちゃ、鳥のように自由
おれたちゃ、無法者
鳥と一緒に風まかせ
どこへ行こうと同じさ
(リフレイン)

誰かが捕まることもある

そいつは絞首台に
命つきるまで吊るされる
だけどおれたちあ、悲しまない
報いは自由ってこと
葡萄酒一本あれば
奴の弔いは十分さ

というのも、おれたちゃ、鳥のように
自由
おれたちゃ、無法者
鳥と一緒に風まかせ
どこへ行こうと同じさ
(リフレイン)

Aus „Narrenkönig“ (2002)

リフレインが延々と続きますが、この部分「おれたちゃ、鳥のように自由だ」と言っておいて、その次の行に自分たちが法律の枠外にいるという「おれたちゃ、無法者」という一文がきます。単語の語呂合わせなのですが、一方で我々は鳥と一緒に風に乗ってもうどこへ行こうと同じだ、流れ者の犯罪集団だ、と聞き直りの宣言をしているわけです。これはドイツ語の „vogelfrei” という言葉の歴

史的な含意が分かっていないと成り立たない。中世から近世にかけてのドイツ社会で定着した形容詞の意味をちゃんと心得たうえで歌っている点で、なかなか面白い内容です。

ちなみに、フォーゲルフライという単語、私が以前訳しましたロマン派の作家フケーの『水の精（ウンディーネ）』にも同じような意味で用いられている箇所があります。森の中でもものけが主人公の騎士に近づく場面でこう語りかける。「私の名前はキューレボルンというんだ、何て名前をつけてもいいんだが、キューレボルン男爵（フライヘル）といってもいい、私は森の中では鳥のように自由ですから。」ここもフォーゲルフライという単語を上手く使った一節です。フライヘル（男爵）を名乗りながら、自分から無法者だ、危ないぞ、と言っているのですね。ともあれ、シャントマウルのようなロック・バンドが文学的な蓄積をうまく採りこみながら作詞しているのも「中世ロック」の特徴と言えるかもしれません。

最後にバンクライス（意味は「魔圏」）を紹介しましょう。最初に挙げたSvbyway To Sallyのボデンスキーが中心となり、ヴォーカルのエリック・フィッシュからSTSのメンバーも何人か加わって新しく2017年に結成された「中世ロック」のバンドです。2018年にファースト・アルバム『秘蹟（Sakrament）』が出たのですが、これがなかなか良い。そこに取められた「渡し守（Fährmann）」の歌詞を見てみましょう。

Bannkreis: Fährmann

Weit gegangen
Und gestrandet
Steh ich hier am Ufer nun

Will hinüber
Will dir folgen
Viel zu müd um auszuruhen

Ich atme tief die kalte Nachtluft
Wind weht über meine Haut

「渡し守」

はるか遠くへ
流されて
いまこの岸辺にいる

向こうへ行きたい
お前さんの後についていきたい
疲れ果てて、休みがとりたい

私は深く冷たい夜の空気を吸い込む
風が私の肌を撫ぜ、

Ich leg die Hände an den Mund
Und dann ruf ich laut:

‘Fährmann, ach Fährmann
Komm setz mich über den Fluss
Eile herbei
Weil ich endlich nun hinüber muss
Tief sind die Wasser
Doch tiefer ist mein Leid
Bitte Fährmann, hol über ich bin bereit’

Nebel wallen
Donner grollen
Ich seh das andre Ufer schwach

Du gingst vor mir
In das Dunkel
Wart auf mich, ich folge nach

Ich atme tief die kalte Nachtluft
Wind weht über meine Haut
Ich leg die Hände an den Mund
Und dann ruf ich laut:

‘Fährmann, ach Fährmann
Komm setz mich über den Fluss
Eile herbei
Weil ich endlich nun hinüber muss
Tief sind die Wasser
Doch tiefer ist...

私は両手を口にあて、
大声で叫ぶ。

渡し守よ、渡し守よ
こっちへきて、私を川向うへ運んでくれ
急いでくれ
もうあっちに行かねばならないんだ
水は深く
わが悩みはさらに深い
渡し守よ、私を向こうに、こちらの準備はできている
霧がたれこめ
雷鳴がとどろき
向こう岸がよく見えない

お前は私の先を行き
闇のなかへ
待ってくれ、ついていくから

私は深く冷たい夜の空気を吸い込む
風が私の肌を撫ぜ、
私は両手を口にあて、
大声で叫ぶ。私は両手を口にあて、
大声で叫ぶ。

(リフレイン)

Ruder tauchen in das Wasser
Seh des Fährmanns Schatten schon
Und er streckt die bleiche Hand aus
Fordert seinen Lohn

Blickt mir tief in meine Augen
Lacht mich aus und fährt davon

'Fährmann, ach Fährmann

...

櫓が水に沈み
渡し守の影が浮かぶ
奴は青ざめた手を伸ばし
報酬を求める

私の眼を深く覗きこみ
笑い飛ばすや去って行く

渡し守よ、渡し守よ
(以下リフレイン)

Aus „Sakrament“ (2018)

この歌詞の特徴はドイツ詩の韻律法の基本である抑揚／短長格 (Jambus) と揚抑／長短格 (Trochäus)、揚抑抑／長短短格 (Daktylus) のリズムを自在に使いこなし、冠詞 “der, die, das” に抑の部分を効果的に担わせ、ロックの拍子に乗せているということ、それから脚韻ですね。男性韻と女性韻が上手く組み合わさり、過去分詞が脚韻の要になっている。ドイツ詩の伝統を踏まえたうえで作詞しているのが分かる。ヴォーカルに女性が加わって、マッチョさが軽減されているのも新機軸です。ぜひ来日してほしいと思います。

中世文学の発見という点で、先ほど川口先生がおっしゃられていたように、ドイツ文学の場合にはミネゼンガーや、恋愛歌人のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデがだいたい 12 世紀から 13 世紀、重要なのは日本でも有名な『ニーベルンゲンの歌』が 1200 年ごろ、それからヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルツィヴァール』が成立します。この辺がドイツ文学で中世文学といわれるのですが、『ニーベルンゲンの歌』に関しては興味深い発見史があります。最初は 18 世紀末に古典文学者がスイスで発見しました。だがその当時、その中高ドイツ語の原テキストをベルリンで出版しても全然反響がなかった。

ところがドイツ文学者の最初期の人物にフリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン (Friedrich Heinrich von der Hagen) という人がいまして、この人物が 1807 年にベルリンで、当時のドイツ語により近い、新高ドイツ語に訳し直して出版したところ、この『ニーベルンゲンの歌』が売れました。さらに 1810

年には改めて、中高ドイツ語版も編集し直しました。ナポレオン軍の占領下でのドイツ中世の再発見というのはきわめて政治的な文化的営為と言えます。このドイツ語訳はあのゲーテも早々取り寄せて熱心に読んでいるほどです。このようなドイツ中世文学研究がドイツのナショナリズムの高まりとともに知識人の間で広がりを見せる。先ほど少し触れたロマン派のフケーも『北方の英雄 三部作』という、後にワーグナーの楽劇の元になるような劇詩を書いています。これも占領下 1810 年のことです。

私が皆さんと一緒に考えてみたいのは、19 世紀初頭のロマン派による中世の再発見がナショナリズムの萌芽であるとするれば、21 世紀の中世ロック現象が意味すること、それは何かということです。私は少なくとも「中世文学」のへ目覚めではないと考えております。というのも中世文学のテキストは一切使っていないからです（ラテン語で歌っているものはありますが）。

この現象を説明するとすれば、一つに、RPG（ロールプレイングゲーム）の世界の浸透があるのではないか。舞台が超時間的な架空の中世に設定され、怪物や敵と闘い冒険行を続けるゲームが世界中の若者の間で愛好されています。「中世ロック」グループの疑似中世的なコスチュームはゲームの延長のようにも見えます。一方、歌詞においてロマン主義的なものへの傾斜が顕著で、この 21 世紀において 19 世紀の残滓への回帰が始まっているとすれば、ドイツ人のなかにも「国民的／ナショナルな」ものを求めたがる心理が隠されているのではないか。今現在のドイツは移民国家への転換をはかりつつあります。するとそういう流れに内心抵抗を感じる人たちが、「中世」に表象される世界に惹かれてゆく（もしくは逃げてゆく）という仮説も成り立つのではないか。なかなかこの辺の見極めは難しい。エンターテインメントの世界ですから、あまり無粋なことは言いたくない。「中世ロック」のバンドが、あえてドイツ語で、自分たちの言語であるドイツ語で歌う、ドイツ語の特徴を完全に活かしたロックを歌うということ、さらにテーマが「中世」という反時代的で、政治的含意を超えた世界に限定されていること、こういったもろもろの意味について考えてみると、インターナショナルな英語ロックに背を向け、政治的なプロテストというロックの反骨精神からは遠く離れた地平を目指す作り手の頑なな意志を感じます。ご清聴ありがとうございました。